

作物名:なし

病害虫名:赤星病(病原:*Gymnosporangium asiaticum*)



写真1 なしの発病葉



写真2 なし葉裏に形成された毛状体



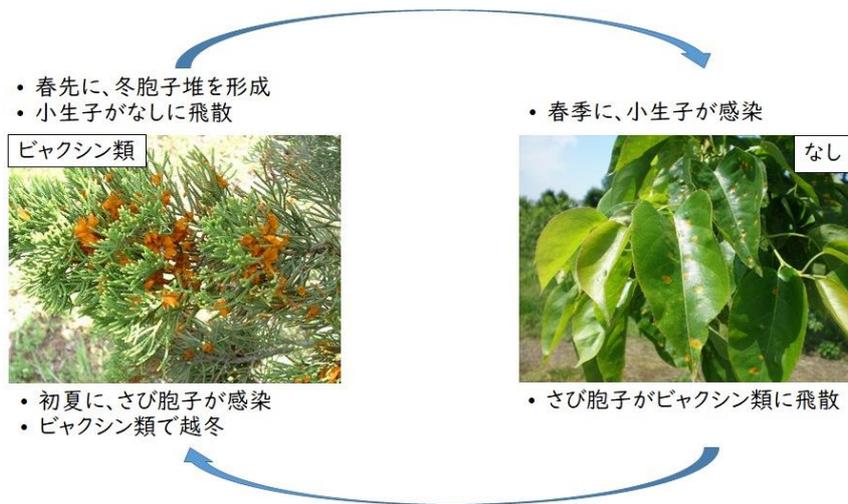
写真3 ビャクシンに形成された冬孢子堆(左:膨潤前、右:膨潤状態)

1 被害の特徴と診断のポイント

- 展葉間もない幼葉の葉表に、橙黄色の斑点を生じる。
- 病斑は次第に拡大して直径数mmになり、中央部に赤黄色の細点を多数生じる。
- その後、病斑の葉裏側にタワシ毛状の毛状体が形成される。さらに症状が進むと、病斑の葉表側にも毛状体を形成する。
- 葉を始め、果実などにも発生する。

2 伝染源・伝染方法

- 本病原菌はビャクシン類を中間宿主とし、ビャクシン類の葉で越冬する。
- 春季に、ビャクシン類の葉に形成された冬孢子堆が成熟し、降雨によってゼリー状に膨潤する。
- 膨潤した冬孢子堆に小生子が形成され、風雨によって飛散して(1~2km程度)、なしに感染する。
- 病斑に形成された毛状体の先端から粉状のさび孢子が飛散し、ビャクシン類に感染する。
- さび孢子はなしには二次感染せず、ビャクシン類のみに感染する。



3 発病しやすい条件

- なしへの感染は、春季にビャクシン類から飛散する小生子。
- 小生子は、1~2km程度は飛散するといわれており、その範囲にビャクシン類があると発病しやすい。
- 本病原菌はビャクシン類で越冬し、なしでは越冬しない。

4 防除方法

- 冬孢子堆の膨潤以降、なしの花蕾出現期~落花期頃が、本病原菌の感染時期となる。
- 開花直前直後に、本病に登録のある殺菌剤を散布する。
- 感染時期に降雨が少ない場合は、落花期以降も感染する可能性があるため、なしの幼果期まで本病に登録のある殺菌剤を散布する。
- 可能であれば、なしほ場周辺(1~2km程度)のビャクシン類を除去する。
- 近年は、感染時期に本病に効果が高い殺菌剤の散布が一般化しており、目立った被害はみられない。ただし、感染時期に本病に効果が期待できない殺菌剤を選択すると(例:QoI剤)、長年発病がみられないほ場でも発病する可能性があるので注意する。

5 出典

(1) 参考文献

- ひと目でわかる果樹の病虫害第二巻(改訂第二版)(日本植物防疫協会)
- インターネット版 防除ハンドブック 日本ナシの病虫害(全国農村教育協会)

(2) 写真

- 宮城県病虫害防除所撮影
- 宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部病害チーム撮影

(令和7年5月作成)